



■平成28年産水稲

作柄概況について

平成28年産水稲は、生育期間を通じておおむね天候に恵まれたため、全稲数が一部を除き平年を上回ったことや、8月下旬以降が日照不足傾向で経過したものの、登熟はおおむね順調に推移したことから、1㎡あたりの籾数は「やや多い」となりました。そのようなことから、今年度の滋賀県、湖南地区の水稲の作柄は10aあたり543kg、作況指数は「104」（※10月15日現在）「やや良」となりました。※昨年は、作柄526kg、作況指数「100」



■平成29年産水稲に向けて

気象状況に負けない米づくりは、土づくりからです。土は、一年間水稲を作った分だけ痩せています。人間も働いた後に栄養を取らないといけないように土も栄養補給を怠ると、次の年に良いお米を作ることができません。当JAが推進する土づくり肥料「とれ太郎」は作物へのケイ酸吸収率が高く、根や茎が丈夫に育つので倒伏に強く、登熟歩合や千粒重の向上につながり、さらにカドミウム吸収抑制にも貢献します。

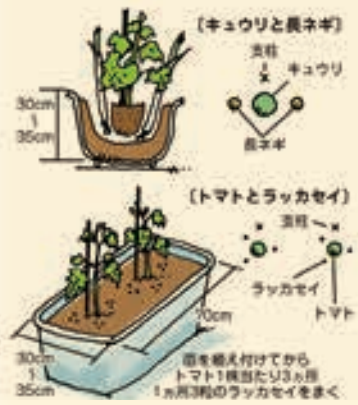
土づくり肥料の散布は春先まで可能ですので、未散布の方についてはこれからでも土づくり肥料の散布を実施しましょう。

基本技術の確実な実施が米づくりで大事です。土づくりは、その最初の一步です。

混植

手軽にできる有機ベランダ栽培

ベランダ栽培では一つのコンテナに1種類の野菜を栽培することが多いのですが、自然界では、1種類の植物だけで生育していることはまれです。本来はいろいろな植物が混ざり合って存在し、互いが生存できる安定した生態系を作り出しています（食ったり食われたり、栄養分を与えたりもらったり、あまたの競争、寄生、共生の中でバランスが取れている）。それに対してコンテナ栽培は多様性が著しく低いので、バランスが崩れやすく不安定な状態になります。そこで、同じコンテナに異なる作物を同時に作付ける（混植）と、土壌微生物も多様になり、天敵も増え、病害虫が抑えられて安定性が増します。限られた狭い空間なので、栄養分や日照の競合がなるべく起こらない組み合わせが大切です。草丈の高低、吸収する養分の多少、養分の好み、発生する病害虫の種類などを考慮します。さらに天敵を増やす作物（オクラや麦など）、植物や微生物が特殊な物質を放出し周辺の生物に影響を与える現象（アレロパシー）などの利用も有効です。



トマトとニラ、キュウリと長ネギの混植では、それぞれの根が絡むように近くに植えると、トマト（萎凋病）、キュウリ（つる割病）の土壌病害を防ぐ効果があります。この他にも、葉ネギがハウレンソウの萎凋病、長ネギがイチゴの萎凋病を抑制することも知られています。さらに、根粒菌が根に共生するマメ科の野菜との混植は、窒素が供給されて生育を助けてくれます。例えば、トマト、ナスにはラッカセイ、ニンジンにはエダマメなどがよく利用されます。

混植では相性の悪い組み合わせもあります。「ダイコンとレタスとイチゴはニラと駄目」、「トマトとナスはジャガイモやトウモロコシと駄目」、「キュウリとスイカはインゲンマメと駄目」と覚えておきましょう。